



TITLE:

# <研究論文>小学校教師杉渕鐵良の ライフヒストリー：教師としての成 長の転機

AUTHOR(S):

細尾, 萌子

---

CITATION:

細尾, 萌子. <研究論文>小学校教師杉渕鐵良のライフヒストリー：教師としての成長の転機. 教育方法の探究 2012, 15: 9-16

ISSUE DATE:

2012-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190393>

RIGHT:

## 小学校教師杉渕鐵良のライフヒストリー

### ——教師としての成長の転機——

細尾萌子

#### 1. はじめに

斎藤喜博は、「創造と発見とをとめない、生命的な力を持った授業は、このように徹底的に事実につくということと、リズム感とか、ドラマ的なものとかが、みごとに結合してはじめて実現するものである」と述べている<sup>1</sup>。この言葉をまさに体現する授業を創り出す小学校教師が、「教育の鉄人」こと、杉渕鐵良（すぎぶちてつよし。52歳）である。

「どの子も伸ばす」。杉渕先生は、シンプルなこの信条を、29年間、ただひたすらに追究してきた。すべての子どもが全力であいさつをする。話し合いでは、全員が自分の意見を発表する。学級全体が、声を響かせて歌を歌い、踊りを舞う。“全員”。口では簡単に言えるが、極めて難しいことに挑戦し、実現している。

2011年10月15日の授業中のある場面を紹介しよう。国語の「一つの花」で、お父さんがゆみこに花を一つ渡し、出征してから10年たったところである。まず、「それから、10年の年月が過ぎました」を、学級全員で音読する。苦しい10年、楽しい10年、色々あった10年、早く感じた10年。様々な状況に合わせて音読の表現を変えること（「表現読み」）で、つらい戦争から平和な今に至る時間の流れをイメージする。

次に、「小さな家は、コスモスの花でいっぱいに包まれています」という教材文の一文について、子どもたちが自分の解釈をどんどん発言していく（「一文解釈」）。「いっぱい咲いたのはお父さんの思いがあったから」、「コスモスで包まれているのはゆみことお母さん」、「コスモスの一輪一輪にお父さんが入っている」、「お父さんが自分の代わりに渡したから、お父さんがゆみこの家を包んでいる」。こうして子どもたちは、包んでいるのはコスモスではなくお父さんの気持ちであり、包まれているのは家ではなくゆみことお母さんな

のだという二重の比喩に気づく。この気づきは、“戦争の悲惨さ”という教材文のメッセージの裏にある、“父の子への愛情”という隠れたメッセージにつながっていく。花はお父さんの命、愛の表れなのである。

杉渕先生の授業は、多くの教育学者やジャーナリストから注目されてきた。藤岡信勝は、杉渕先生の指示や発問、評価といった授業技術の長所と問題点を分析している<sup>2</sup>。櫻井よしこは、人間を鍛える道徳教育という観点から、正しい姿勢を保たせる、音読を通して想いを表現させるなどの杉渕実践の特徴を描いている<sup>3</sup>。

しかしながら、これらの先行研究においては、“その時”の実践の特徴に焦点が当てられているため、杉渕先生がいかなる契機で現在の実践を創り出すに至ったのかは検討されていない。そのため、教師をめざす学生や若い教師にとって、自分はこれから教師としてどのように育っていったらよいか、教師としての歩みをイメージすることが難しい。

そこで本稿では、杉渕先生の成長の鍵となった転機をライフヒストリーとして描くとともに、その転機に伴って授業スタイルがいかに変容してきたのかを明らかにする。これにより、教師の力量形成過程のあり方について考察したい。

“転機”に着目するのは、教師の発達には、一定の理想像に向けて、どのような状況でも通用する要素を身につける普遍的・垂直的なものではなく、それぞれの新たな状況に対応して何かを獲得したり喪失したりして変容していく個別的・オルタナティブなものであるからである<sup>4</sup>。教師としての専門的力量的内実は、教師の実践をライフヒストリー全体の中に位置づけることで初めて見えてくると考える。それゆえ、杉渕先生の転機を、教師になってからだけではなく、大学入学前や大学での養成教育期間から、学校での出来事に加

えて個人としての出来事からも探っていく。

なお、ここでの「ライフヒストリー」という言葉は、情報提供者によって語られた生の「ライフストーリー」を聴き手なりに理解し、意味づけし、解釈し、歴史として再構成した人生という意味で用いている。

研究方法としては、杉渕先生にライフヒストリーの聞き取り調査（2012年1月28日）を行った。その準備として、4年4組で2011年度の杉渕先生の授業を5回観察（4月6日、6月11日、7月9日、11月15日、1月27日）して実践の特徴を把握し、杉渕先生の既刊・未刊の本・冊子<sup>5</sup>によって実践の読みとりを補完した。以下の記述はすべて上記の資料から得た内容であるが、煩雑さを避けるために逐一出典先を記していない。

## 2. 誕生から大学までの被教育体験（1959年-1982年）

杉渕先生は、1959年に、東京都文京区の新町で生まれた。厳しい人が多く、本音を言う、昔の江戸のよさが残る地域であった。1966年に、文京区立明化小学校に入学する。4年生の担任のN先生には、今でも強烈な印象を持っている。太宰治や宮沢賢治、ニーチェの本を読み聞かせてくれ、感想を書いたりした。それが面白く、本が好きになった。その上、先生は文京区の野球のエースであり、体育が得意で憧れた。自分もN先生のような体育の教師になりたいと思った。

5年生の時に練馬に引っ越し、北町西小学校に転校する。ある日図書館で偶然、江戸川乱歩の本に出会う。『透明怪人』という、怪人二十面相のシリーズである。読んでみると、面白い。それからルパンやホームズなど推理小説にはまり、さらには図書館の本をほとんど全部読んでしまう。以降、本がもっと好きになった。

6年生の時には、発掘にはまる。Uくんという友だちに発掘に誘われて付いていくと、彼は専門家で色々な器具を持っており、土を掘ると矢じりや石器、土偶などが出てくる。面白くて毎週堀りに行った。たまに完全なものが出土して博物館に寄付したり、欠けた部分を石膏で埋めてコレクションしたりした。土器の専門書を買ひ、辞書を引きながら読むほどに熱中する。

1972年に、東京都練馬区立北町中学校に入学する。得意な分野では勝たなかった。長距離1500m走は得意だったが、1年生の時に、宿敵のNくんには勝てなかった。勉強もできるやつ。絶対勝つてやる。朝と夜、毎

日走って、中3で決選。ニコッと笑って勝った。

この1年生の時、国語担任のK先生は「才能がある」と認めてくれ、成績も5段階評価で5だった。しかし2年生で、国語の成績が2になる。国語のT先生に、「テスト90何点で学年トップなのに、なんで5から2になるんですか？」と聞くと、「お前の態度が悪いからだ。嫌いなんだよ」と言われる。教師不信になってやる気をなくし、体育以外の成績がガタ落ちしてしまう。

1975年に、東京都立志村高等学校に入学する。3年生の担任の産休補助に来た先生がきっかけで、少林寺拳法に出会った。道場に週三回通い、初段まで取得した。こうして自分が強くなりつつ後輩に教え、後輩が全国大会に出た。この頃から、教えるのは好きだった。

その背景として、父親の影響がある。父は教えるのが上手かった。地元のプールで、他の親が自分の子どもに泳ぎを教えても泳げないのを見て、父が教えると、1時間もしないうちに25m泳げるようになった。その父の教え方を小さい頃から見て、自然に学んだという。

高校では、N先生のような体育教師になるべく、日体大に入る準備をしていた。しかし、3年生の担任のI先生に、「君は小学校教師の方がいいよ。灰谷健次郎の『兎の眼』を読みなさい」と言われる。読むとこれだ！と思い、小学校教師になることにした。ただし、少林寺拳法に明け暮れて受験勉強をしていなかったため、浪人し、1979年に青山学院大学に入学する。

大学では、少林寺拳法の練習に傾倒する。授業については、様々な本を紹介してくれた倫理学のO先生の言葉が心に残った。「まず教育書を100冊読め」と。

4年生の時には、中野区の仲町小学校に教育実習に行く。指導教諭のA先生が、「毎日子どもの記録を取るのがいいよ。一人一言でもいいから、書けない子どもがいてもいいから」と言ってくれた。これは、今の「子どもを見る」実践の原点となっている。若い教師たちも、自分の教材研究が終わっていなくても飲み込んで連れて行ってくれたり、教材を見せてくれたり、親切にしてくれた。本当に教師になると思った。

それから、O先生の言葉を思い出し、教育書をかたっぱしから読んだ。家の二階にある勉強部屋の本が何千冊になり、一階のドアが開かなくなるほどだった。その中で出会ったのが、岸本裕の『見える学力、見えない学力』（大月書店、1981年）である。

### 3. 自分流教育の原型の確立（1983年-1990年）

教育実習中に教員採用試験に合格し、教師修行の歩みが始まった。1983年に、東京都練馬区立光が丘第一小学校に就任する。1年目は2年生担任で、岸本氏の本を参考に、百マス計算や漢字練習など、基礎学力の訓練を毎日行っていた。「できない」と子どもが泣いても、「やれー！できる」と言って力技でやらせていると、全員が百マス計算で2分を切るようになり、学級が元気になってきた。毎日やると力がつくということを実感した。その前提として、朝と休み時間、放課後、子どもとずっと遊んで好かれていたため、授業が下手でも、自分が言うことをまじめに聴いてくれた。

さらに実践と並行して、東井義雄（『村を育てる学力』など）や西郷武彦、落研などの基本文献を読破し、なかでも斎藤喜博の本を愛読していた。斎藤氏の指導した子どもたちは生き生きしている。とくに教室日録が収められた『全集1 教室愛・教室記』（国土社、1969年）は、今でも印象に残っている。こういう子どもたちを育てたい、斎藤喜博を超えたい！と思った。

このように熱心だったので、学校の教師の先輩が「文学教育連盟」の講座に誘ってくれた。そこで国語の授業を見て、ショックを受けた。子どもがいきなり立ち、教師が指名しないのにどんどん発言していく。すぐに授業者に「書き込み」を教えもらい、次の日から実践する。子どもが各自、教材文について考えたことを何でも書き、学級全体に発表し、教師はそれにコメントするという方法である。こんな発想もあるのだと視野が広がり、子どもに教えられた。

2年目には、斎藤氏の本と思って『斎藤喜博を追って』を買うと、斎藤氏の本ではなかったがすごい。この著者、向山洋一に学びたいと思った。講演会を聴きに行くと、向山氏に声をかけられ、「東京青年塾」という若手教師のサークルに誘われた。毎月実践レポートを書いていき、向山氏に検討してもらい、全国の熱心な教師たちと、実践について思いっきり語り合った。

このサークルで向山氏に教わった一言が、「教科書見開き1頁で問題を100問作れ」である。5年間毎日やり通した。すると、1問くらいよい発問がある。この修行は、後の「一文解釈」の基礎になったという。

向山氏には、「映像で自分の授業を記録しろ」とも言われた。そこで新任2、3年は、毎日、授業をテーブ

で録音して聞いた。怒ってばかりなど、授業中には気づけなかった自分の行動に愕然とした。

2年目には、学芸会の指導にも力を入れた。親友の小学校教師の阿部肇氏が劇団の演出家でもあり、毎日家に行って教えてもらったり、学級の子どもを直接指導してもらったりした。笑う時と泣く時は呼吸が違う、舞台のここに立つと大きく見えるなどである。

3年目には、26歳で研究主任になった。認められたうれしさから、力量を高めるべく、「学校体育同志会」というサークルの研究会に毎週参加し、実践レポートを書いて持っていった。このサークルに参加したのは、サークルの主催者である小学校教師の大貫耕一氏を友人から教えてもらい、著作に感銘を受けたためである。

学校では他の教師たちとプライベートで仲良くなって信頼を得、器械運動教育の研究を学校全体ですることになった。校内研では教師全員が授業を公開し、その記録を書いた。学校づくりの取り組みである。

この頃から、子どもを全員できるようにするという信念のもと、実践に突き進んでいた。その一因は、鈴木鎮一『愛に生きる 才能は生まれつきではない』（講談社、1966年）を読んで衝撃を受けたことにある。日本人は誰でも何の苦なしに日本語をしゃべっている。それは、生まれてから今まで教育を受けてきたからであり、正しい訓練を続ければ、すべての子どもが育つと述べられていた。自分はどの子も伸ばすと決意した。

5年目には、実践論文を4カ月で100本書き、東京青年塾の法則化夏合宿に持って行った。その合宿で、サークルをやめた。子どもを伸ばすためではなく、名声や運動のために本・論文を書く方向にサークルが傾いていることに、賛同できなくなったためである。

教師7年目の1989年には、東京都板橋区立下赤塚小学校に転勤になる。1年目は1年生担任で、自閉症の子を受け持った。金魚鉢をいきなり倒したり、水道の水をジャーと出したりして、どうしたらいいかわからなかった。その子は集中力が長く続かず、授業中ふっと目を話したら教室を出てしまう。そこで、この子も他の子と一緒に学習できるシステムとして創り上げたのが、「ユニット授業」である。

「ユニット授業」とは、45分の授業を細かい単位に分け、それを組み合わせたものである。国語なら、漢字まじりの文章の復唱と高速読みを1分ずつ、漢字100

+	1
3	4
5	6
9	10
4	
0	
2	
7	
1	
6	
8	

図 1 足し算  
の 10 マス計算

問テストを 5 分、教科書音読を 3 分、  
「表現読み」を 3 分、「ごんぎつね」に  
ついての話し合いを 20 分、まとめを書  
く活動を 10 分というように、である。  
新採の頃から取り組んでいた 100 マ  
ス計算も、10 マス計算に変えた。  
図 1 に、+1 の 10 マス計算の例を  
示している。1 を左列の数字に足  
していき、その答えを右列に書く。

このように学習内容を短時間で交換すると、自閉症  
の子も少しずつ学習するようになっていった。ただこ  
の子には、これまで学んできた授業技術が通用しない。  
そこで、子ども全員の記録を毎日細かく取り、“その子”  
にどんな手を打ったらよいか考えるようになった。こ  
の作業を通して、子どもは一人ひとり違うこと、障害  
があってもその違いに応じた工夫をすれば、どの子も  
伸びることに気づいた。すると、今までのように勢い  
で授業をするのではなく、実践が柔らくなった。

またこの学級では、もう一つの驚きの出会いもあつた。  
ある子が育てる花は、元気になる。枯れかけの花  
も、息を吹き返す。その子は、「おはよう、咲いてね」  
など、毎日花に話しかけているのだという。こんなに  
小さな子が、花は話しかければ育つと信じて声をかけ  
続けている姿を見て、自分は本当に子どもの可能性を  
信じ切り、ひたむきに毎日実践を重ねているか、と考  
え直した。自分は一生懸命に授業しているのだから伸  
びると、嫌らしい心があるのではないかと。

翌年 1990 年 3 月のある晩、「天からのメッセージ」  
が降りてきた。「どの子も伸ばす」という問題意識やこ  
れまでバラバラだった個々の実践が、①「基礎の時間」  
と②「追究学習」、③「表現」の三つを柱として、一つ  
に結びついた。教科という枠を取り外し、この三つで  
一週間の時間割を構成するようになり、杉淵流授業の  
原型ができあがった。以下、三つの柱を紹介する。

①「基礎の時間」では、毎朝 30 分、計算と漢字、  
音読の習熟のための練習を行う。

②「追究学習」では、子どもたちが見つけた？（課  
題）を追究する。まず、子どもが「見たこと」作文を  
家で毎日書いてくる。興味のある対象を見ながら、気  
づいたことや考えたこと、調べたことなどを書く作文  
である。学校では、この「見たこと作文」の「発表会」

を毎日 30 分程行う。一人が 1 週間に 1 回発表する。発  
表者は、自分の「見たこと」作文の中から、「どうして  
も発表したい」「ぜひみんなで話し合ってほしい」もの  
を教師と一緒に選び、家で発表の練習をした上で発表  
する。ある程度話し合ったら、次の子が発表する。さ  
らに、週 5 日（40 分/45 分）の「追究学習」の時間  
には、全員が同じ題材について学習する。「発表会」で  
出た？で、「これはもっと時間をかけて話し合いたい」  
「みんなで追究したい」と決まったものが題材になる。

③「表現」では、子どもたちが色々な形で自己表現  
する。描く、歌う、身体表現などである。

こうして無我夢中に修行した 7 年から、今の杉淵実  
践に受け継がれている、基礎と追究、表現という柱が  
生まれた。この成果は、初の単著『ぐんぐん力がつく  
授業づくり・学級づくりのコツ：自分流の教育をつく  
る』（学事出版、1993 年）に結実する。そこには、当  
時流行していた他の教師の追試をするのではなく、優  
れた教師の精神を取り入れ、自分独自の実践を創り上  
げることの重要性がメッセージとして込められている。

#### 4. 自分を変えた人々との出会い（1990 年-2005 年）

上述した表現の指導をする中で、子どもたちの歌声  
が「地声」であることが気になってきた。子どもたち  
のエネルギーを引き出すために、もっときれいな声に  
したい。そこで 1990 年から、鎌田典三郎氏の本やビデ  
オに学びながら、「歌う声」の指導を始めた。鎌田氏は、  
「西六郷少年少女合唱団」を創設した音楽教育者であ  
る。年度初めは、2 年生なので音程が取れず、発表会  
で保護者たちが大笑いすることもあった。しかし、10  
月の学習発表会で合唱構成「ぞうれっしゃがやってき  
た」を子どもが発表し、声がきれいになったのを目の  
当たりにして、保護者の中には感動で泣く方もいた。

そして翌年 1991 年に、ピアノ教室の先生と結婚す  
る。1993 年に長男の竜が、1995 年に長女の由紀子が誕  
生する。低学年になるまではお風呂に入れていた。

こうして結婚して子育てに関わるようになると、子  
どもの見方が変わった。以前はファミレスで仕事中に  
子どもが泣くと、うるさいなと思っていた。しかし子  
どもができること、泣いてお母さん大変だろうな、と許  
せるようになった。自分の子どももへその緒が巻きつ  
いて死にそうになるなど様々なことがあったため、ど

の子どもも親にとって大事でかけがえのない子ということが、実感として理解できるようになったという。

もう一つの変化として、家事や子育てで時間がなくなり、仕事量で勝負するのは無理になった。そこで、優先順位をつけて仕事するようになった。例えば、子ども一人ひとりの記録を毎日つけるのをやめ、寝る前に頭の中で授業を映像として思い出すことを始めた。

1993年には、サークルの合宿で、学級経営のプロである堰八正隆先生と出会った。芦田恵之助の弟子であり、斎藤喜博とともに全国の学校を巡った小学校教師である。以後、堰八先生は生涯の師匠となった。

1994年からは「子どもが創る授業」を実践し始めた。日直と教科系のシステムを作った。日直は3人ずつで、三日間で交代する。「これから〇〇を始めます」など号令を出したり、次の日の学習計画を立てたりする。

他方、教科系は授業を進める。子どもたちが国語、算数、理科、社会、音楽、図工、体育の七つの教科系に分かれる。例えば図工係の子どもたちは、授業の前日に色作りや絵を描く予習をし、授業では学級全体で、三原色による色づくりと空の絵を描く学習を進める。

ただし、子どもに完全に任せると大変な事態になる。そこで、まず子どもに授業を進めさせ、そのよい点を認め、不足している点についてはお手本を見せてイメージを持たせたり、ポイントやコツをアドバイスしたりして、またやらせる。その上で、個別支援もする。発表で発言しない子には、その子の近くに行き、「ねずみを怖がっているの？、嫌いなの？」などと聞いて答えさせ、認めて励まし、それを学級全体に発表させる。すると、子どもたちが自ら課題を作って追究するようになってくる。発言できなかった子も、話し合いで3回、4回と発表できるようになってきた。

この「子どもが創る授業」に加えて、「感化の教育」にも取り組んだ。これまでも自ら掃除をしていたものの、鍵山秀三郎氏の『凡事徹底』を読み、一層徹底した。全校児童の靴を揃えたり、ゴミを拾ったり、黙って毎日行動する。少したつと、「子どもたちが早く手伝うようにならないかな」という思い、さらには「なんで手伝わないんだ」という怒りが出てきた。それを押さえて続けると、掃除自体が楽しくなってきた。靴が揃った時の空気、教室がきれいになった感じがたまらない。「子どもをこうしてやろう」という意識がなくな

った時、子どもたちのほとんどが進んで掃除するようになってきた。昼休みをつぶしてほうきについているゴミを取り続けたり、学校中のゴミ箱を洗ったり、工夫して楽しんでいる。言葉と行動を一致させるべく、教師がただ行動すれば、楽しい、気持ちいいという思いが伝わり、子どもは活動したくなるのだと気づいた。

ただこのようにずっと順風満帆であったわけではなく、失敗もした。1995年に担任した5年生の女子児童を叱ると、お母さんから、「うちの子は傷ついてます。学校に行かせません」などと手紙がたくさん来た。その子に、「お前がちゃんとすればお母さんもちゃんとなるんだ」と言ってしまう。すると、その子は1週間程不登校になった。家に行ってみると、その子の写真が、壁一面、天井全部に貼ってある。この子の家庭状況を知っていれば、もっと優しく対処できたのに、と反省する。自分の強気な性格で、子どものことをわかっていないのにわかっているつもりになっていた。

この頃、学校での人間関係もうまくいかず、学校づくりをするために、自分が徹底的に変わろうと決意する。正義感が強すぎて人に厳しくなりがちであり、他人の落ち度を指摘してその場の雰囲気が壊れてしまうことが重なった。しかし、学校全体での取り組みは、提案を他の教師たちに賛同してもらい、協力して一緒にやろうという雰囲気を作らない限り、できない。

そこで、自分の人格を変えるべく、姿勢を正して瞑想する岡田虎二郎の静坐をしたり、日本の一流と言われる人の話を聞いたりして、優しくなろうとした。

しかしながら、性格を変えるのは難事業であり、学校づくりの壁は依然として高い。原点に戻って学級づくりをするべく、転勤することを決める。性格改造にはこの後15年ほどかかることになる。

1997年に妻子とともに神津島に移り、東京都神津島村立神津小学校に赴任した。空気や水がおいしく、自然も豊か。ただ当時の小学校は荒れており、学力の低い子どもが少なくなかった。全員の机がいたずら書きで黒く、消してもまた書く。子どもは「お前島知らないだろ」と言う。今までの教育技術が通用しなかった。

まずは島を知り、地域の人に味方になってもらうことが肝心だと思った。男親の多くは漁師である。互いのことを知っているので、家には鍵をかけない。女の子でも自分のことを、俺、わしと言う。異文化だった。

2000年7月には、島で震度6の地震が起きた。自分以外の教師はみな、夏休みには本土に避難した。しかし島には、島の子がまだ50人くらい残っている。そこで、自分は家族とともに残り、復興の手伝いをした。こうして、地域の人が信頼してくれるようになった。

この2000年には、前述の阿部氏の支援を受けながら、ソーラン節の踊りの指導を始めた。地域で評判になり、老人ホームから呼ばれたり、韓国の学校と交流を行ったりした。2002年には、原作者の民謡歌手である伊藤多喜雄氏が自ら見に来てくれ、伊藤氏の生歌で子どもたちが踊り、ほめてもらえるというドラマがあった。

前述した三つの柱に「歌う声」やソーラン節、掃除が加わり、子どもたちは学力面だけではなく、海岸のごみを毎朝自主的に拾うなど、行動面でも伸びてきた。

そうして学級がよくなってくると、副校長が、基礎学力づくりを軸に学校づくりをやってくれと任せてくれた。他の教師たちも認めてくれ、みんなで学校をよくしようという雰囲気も生まれた。若い教師が自分の学級を毎日見に来たり、放課後に同僚の相談に乗ったりして、互いに高め合うことができた。全校児童が週に1回集って音読と歌を発表し合い、互いに刺激を受ける、全校授業というシステムも創ることができた。

2002年に、東京都板橋区立新河岸小学校に転勤する。そこでは基礎学力づくりの時間を学校全体で導入しようと提案し、校長先生が賛成してくれた。初めは様子見をする教師もいたが、実践が軌道に乗って来ると、「子どもを伸ばす」という理念を教師全体で共有し、新河岸小の三つのシステムを構築することができた。

一つ目は、チャレンジタイムである。毎朝15分、基礎学力づくりをする。二つ目は、全校チャレンジである。月に1回15分間、全校児童の前で、各学級が音読や歌の発表をする。上級生の発表を聴いてあこがれを持ち、また下級生の発表を聴いて負けていられないと奮い立てるためのしかけである。三つ目は、45分の授業の中に5～10分基礎・基本の時間を入れ、授業末には2～5分、授業の「振り返り」を書かせることである。基礎・基本の時間には、国語なら新出漢字や文法事項、ことわざ、慣用句などを、テンポよく学習する。

このように基礎・基本を重視したのは、考えるためには前提として知識が必要であり、知識は何回も反復して初めて定着すると捉えていたためである。

新河岸小のシステムは公立小学校の挑戦として注目を集め、陰山英男氏のプロデュースにより、2003年8月26日のテレビ番組「ガイアの夜明け」で自分の実践が紹介された<sup>6</sup>。陰山氏とは、新河岸小学校で講演をしてもらって以後、長く付き合うことになる。

2004年には、講座で行った自分の模擬授業を、岸本氏が見てくれた。「10マス計算は自分の100マスを発展させてすごい」と認めてくれ、うれしかったという。

#### 4. 自分流教育スタイルの進化（2006年-現在）

以上のような基礎・基本の徹底、追究に向けた子ども主体の話し合い、歌や踊り、絵などの表現といった自分流教育のスタイルはこの後も引き継がれる。しかしながら、2006年頃から、ある変化が現れる。書かせてから発表させるのではなく、まず発表させてそれを書いてまとめさせるというスタイルに変容していく。

2006年2月4日の新河岸小学校の公開授業で、その片鱗が見出せる。6年生国語の「やまなし」の授業場面である。まず、エサを殺す恐ろしい魚、さらにはその魚を食べて消えたかわせみを見て、弟蟹が訴えた「こわいよ、お父さん」というセリフが取り上げられる。このセリフを、状況を想像しながら子どもは各自順番に音読していき、イメージをふくらませる（表現読み）。

次に、「一文解釈」が始まる。「こわいよ」について考えたことを、子どもがどんどん発言していく。「また襲ってくると思って怖いのですか。それとも、思い出して怖いのですか」、「最初の方は思い出して怖くなったんだけど、『魚はこわいところに行った』と聞いて、自分も連れて行かれるんじゃないかと思い返して怖い」、「私も、最初はさっき起こったことを思い出したんだけど、後でお父さんが『魚はこわいところに行った』と言ったから、次は自分たちが怖いところ連れて行かれると思って怖くなった」。なぜ怖いか、と「怖い」感情の中身を追究し、「私も」と友達の見につなげながら、弟蟹の感情に迫っていく。

そして「指名なし発言」が続く。教師の指名なしに、子どもが話し合いを自主的に展開していく方法である。「かわせみは生と死どちらを表わしていると思いますか」とある子が問いかけ、「魚をとって殺しているから死というイメージ」、「かわせみが魚を取ったことでかわせみが生きられるから生の方」と、生と死両方

の観点の意見が出てくる。さらに、「やまなしの方はどうですか」とある子が投げかけ、「両方。死んでしまうけど未来に生を与えるから」、「かわせみと正反対で、自分が殺すことで生きるのではなくて、自分が死ぬことで蟹たちに生を与えられるから」という発言が出される。かわせみ＝死 vs やまなし＝生という単純な二項対立ではなく、かわせみとやまなしともに生と死のイメージの象徴であるものの、自らの生のために他の死を生むか、他の生のために自らの死を選ぶかという違いがあることを子どもたちは発見したのである。

書いてから発表させる以前の方式では、ここまで子どもの意見が出されることはなかった。1988年の4年生国語の「かたつむり」の授業では、「話者は、かたつむりのことをおかしいと思っているのですか、おかしくないと思っているのですか」と発問した後、教室は活気づき、多くの子が手を挙げた。しかし、「理由を書きなさい」と指示したため、子どもたちの「のっている」状態を壊してしまった。理由を書かせてからの発表は、盛り上がりや欠いたものになったという<sup>7</sup>。

このように、書く→発表形式の問題点は、初任の頃から自覚していた。しかし、この形式は教育界の常識であり、うまくいかないのは自分の力量が足りないのだと考え、この形式から抜け出すことができなかった。

ただ、素晴らしいことを書いても、それを読んでしまうので、発言はイマイチな子どもが多い。これは、教師修行を続けてきた自分の指導力の問題というよりは、書く→発表形式の問題である。そう実感し、2006年頃、発表→書く形式に変える踏ん切りがついた。

この形式には裏がある。発表させたら子どもは自動的に深い発言をするというものではない。子ども同士で発言をつなげて高め合えるよう、ものの見方・考え方や思考の瞬発力を毎日の学習で鍛えているからこそ、互いに練り上げる発表が繰り出されるのである。

その証拠に、冒頭で紹介した「一つの花」の話し合いをした綾瀬小学校4-4にも、筆者が観察した2011年4月7日の授業開きの話し合いでは、自分の意見を思いつかなくて「わかりません」と言ったり、前に出た意見と同じ意見しか言えなかったりする子もいた。秋にはどの子も発表し、教材の本質に至る話し合いを子どもたちの手で展開できるようになったのは、先生のような一手が子どもにヒットし続けたからである。

例えば、列順に一人ずつあいさつをさせる「あいさつリレー」を毎日行う。前の子が言い終わると同時に次の子があいさつをする。前の子から声のバトンを受け取り、自分が全力で走り、次の子にバトンを渡す。「相手」を意識し、「つなげる」発想を自然と学ぶ。

道徳教材の「心の信号機」では、「ぼく」がお使いに行く途中で、信号が変わっても横断歩道を渡ろうとしない目の不自由な男の人に出会う。その教材の「渡りだしてから、僕ははっとした」に関する「一文解釈」では、子どもたちの発言を踏まえて発問が出た。「はっとしたのは横断歩道のどこでしょう。右？真ん中？左？」、「渡り終えるまでは『ぼく』にとって短い時間？長い時間？」。このように場のイメージや精神的/物質的な視点に何回も触れることで、子どもはざっと読むのでは「見えない」中身を読み解けるようになる。

先生の一手は、教科的学习だけではなく、給食指導や健康診断などあらゆる場面で打ちこまれ続けている。例えば服を素早くエレガントに着替えさせることで、リズムを壊さないスピードの気持ちよさを体感させる。こうして身につけた瞬発力が、10マス計算や「指名なし発言」などでの思考の速さに波及するのである。

2006年には、引き抜かれて足立区立五反野小学校に移る。1年目は国語専科であったため、1年生から6年生までのすべてのクラスに関わった。しかし、週1回しか積み上げられないので、授業は学級経営が基盤であること、学級担任のよさを痛感した。

2年目は6年生担任となり、班ごとに学び合う「班学」に取り組んだ。漢字の復唱や書き取り、教科書の表現読み、発表する題材についての話し合い、音読と歌の練習などの様々な学習内容を、リズムよく班ごとに子どもたちが進めるというものである。班学を導入したのは、全員できないと次に進めないのも、自然と「学び合い」や「教え合い」ができるからである。

2008年に東京都足立区立綾瀬小学校に転勤した杉淵先生は、今日も授業を楽しんでいる。「教師をやっていると、色んな発見があって、挫折もある。でもそういうのが一個一個刻み込まれていく中で、教師自身が成長していくみたいところがありますよね。だから、教師って色んなことが楽しいんじゃないかと思うのですよ。発言いいこと言うようになったな、とか。幸せなんじゃないかな。教師はやめられない」という。



## 5. おわりに

本稿では、教師をめざす学生や若い教師たちが自らの育ちをイメージできる一助となるよう、憧れとなる一つの教師像を示すことを課題としてきた。

杉渕先生は子どもの頃から、これと決めたことは執念で努力して成果を出さないと気が済まない性分だった。また、学校や教師に対する期待が強く、教師の一言に喜び、悲しみ、人生の決定にも影響を受けてきた。

1983年に教師になってからの7年は、修行時代であった。膨大な書物や先人の実践、学級の子どもたちに学び、基礎と追究、表現を柱とした、どの子ども伸ばす自分流の教育の原型が確立した。

続く16年では、自分の子どもや異文化の島の子どもと出会い、子ども観が揺さぶられた。挫折体験から、人格改造も試みた。“その子”をできるようにするために日々努力し続けるうちに、「子どもが創る授業」や「感化の教育」、「歌う声」やソーラン節の指導といった新しい実践が、知らない間にできあがっていた。

2006年からは、教育界の王道の書く→発表形式を打ち破り、発表→書く形式を開発する。書くことによる制約が取れ、子どもはより解放されるようになった。

杉渕先生はなぜこれほどまでに努力し続けられるのか。2004年に受け持ったある5年生は、目がとろーんとしていて、勉強が全然でできなかった。「僕はって言うてごらん」と言うと、「私が」と答える。でも、毎日泣きながらでも勉強し続けると、漢字がだんだん読めるようになってくる。劇でも、年度当初は演技が全然でなかったのが、年度末にはうまくでき、学級みんなにほめられた。いつも悔しくて泣いていたのに、初めてうれしくて泣いていた。時がたち、お母さんから電話があった。「高校に受かりました。普通科です。先生のおかげです」。「自分から離れて花開くのは、一番うれしいかもしれない」と先生は言う。どの子ども努力すれば伸びるという事実、これが先生を支えている。

「その子が伸びた時、自分は色々なことをやっているから、何がよかったのかはわからない。その子には合うかもしれないけど、他の子には違うかもしれないし、一般化できない。あれもこれもこちらが純粋に一生懸命やって、その中の何かがその子にぽっとヒットして、神様がプレゼントしてくれるじゃないけど、その子がこーんと伸びるみたい。どうやったら伸びる

かわからないから、色んな角度からやっていく。計算がダメな子に、百人一首など違うことをやっているうちに、計算の力が伸びる。巡り巡って、風がふけば桶屋がもうかるみたいな理論ですね。間接性の原理」。

「どの子ども伸ばす」という信念のもと、一人ひとりを見て、その子を伸ばすためにあらゆる一手を打ち、そのからみあいである日子どもがふっと伸びる。この一見当たり前のことを、特定の教科だけや時々ではなく、すべての教科・領域において毎日続ける。これが子ども全員の成長に向けて教師が自己改革していく一つの道であると、杉渕先生は示してくれている。

このような杉渕先生の歩みに応じて、子どもたちの育ちはどのように変容してきたのだろうか。先生の実践記録に掲載された子どもの作品や先生による授業記録を分析し、今後明らかにしていきたい。

## 注

<sup>1</sup> 斎藤喜博『授業』国土社、1963年、pp.36-37。

<sup>2</sup> 藤岡信勝「杉渕鉄良氏の授業と技術…小四国語『かたつむり』」藤岡信勝編『45 分間の授業技術』日本標準、1988年、pp.19-45。

<sup>3</sup> 櫻井よしこ「第五章 すべての科目が道德教育—子どもの倫理観を高める『板橋区立新河岸小学校』の人間育成』『教育が拓く未来—変わり始めた現場からの提言』PHP 研究所、2004年、pp.119-143。

<sup>4</sup> 山崎準二「教師として二十一世紀を生きる—私たちはそれをどのように認識し、援助していくべきなのか」日本教師教育学会編『教師として生きる—教師の力量形成とその支援を考える』学文社、2002年、pp.257-268。

<sup>5</sup> 杉渕鉄良著の次の文献を主に参照した。『私の教育実践—概論—』未刊、1990年。『ぐんぐん力がつく授業づくり・学級づくりのコツ：自分流の教育をつくる』学事出版、1993年。『自分流の教育を創る2』未出版、1995年。『感化の教育』未刊、1995年。『子ども集団を動かす魔法のワザ!』学陽書房、2010年。『完全燃焼! 奇跡の子どもたち4月編』日本標準、2011年。

<sup>6</sup> テレビ東京報道局編『ガイアの夜明け 闘う100人』日本経済新聞出版社、2005年、pp.113-115。

<sup>7</sup> 杉渕鉄良「授業者からのコメント」藤岡編、前掲書、pp.52-53。

(博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)